

平成 22 年 5 月 31 日現在

研究種目：基盤研究 (B)
 研究期間：2007 ～ 2009
 課題番号：19330202
 研究課題名 (和文) 国語科教育改善のための言語コミュニケーション能力の発達に関する実践的・連携的研究
 研究課題名 (英文) Practical and cooperation research on development of the communications skills for a Japanese educational improvement
 研究代表者
 位藤 紀美子 (ITO KIMIKO)
 京都教育大学・学長
 研究者番号：80027713

研究成果の概要 (和文)：話し合いの能力を、個の中の閉じた能力ではなく、関係性の中で捉えられる能力であると捉え、コミュニケーションモデルを構築した。話し合い活動を捉える際に、話し合いの展開の質に着目する考え方をとり、同一課題による小学生の話し合い能力の発達に関する調査に照らして、分析を行った。研究の結果、社会にまなざしを向ける公共性を持った課題に対して論証的に話し合うことが有効であることが明らかになった。

研究成果の概要 (英文)：We built the communication model that communications skills are the ability for it not to be limited to individual capability but to explain in a relation. We conducted development investigation of the talks capability of the schoolchild by the same subject taking notice of the quality of deployment of talks activities. It became clear that it is effective to discuss dianoetic to a subject with the public responsibility which becomes the cause to turn one's eyes to society as a result of research.

交付決定額

(金額単位：円)

| | 直接経費 | 間接経費 | 合計 |
|---------|------------|-----------|------------|
| 2007 年度 | 6,400,000 | 1,920,000 | 8,320,000 |
| 2008 年度 | 4,600,000 | 1,380,000 | 5,980,000 |
| 2009 年度 | 4,300,000 | 1,290,000 | 5,590,000 |
| 年度 | | | |
| 年度 | | | |
| 総計 | 15,300,000 | 4,590,000 | 19,890,000 |

研究分野：国語科教育

科研費の分科・細目：教育学，教科教育学

キーワード：コミュニケーション，音声言語，カリキュラム開発，教材開発，授業モデル

1. 研究開始当初の背景

(1) 国内の研究動向

個人間のコミュニケーションのあり方については、ブーパー、ガダマー、ハーバーマス、ワーチ、ルーマンなどが先行研究であり、

国内のコミュニケーション研究もこれらを基盤に展開されている。麻生武、尾関周二、丸野俊一が主要な研究者である。しかしながら、日本の国語教育研究において、授業論、教材論、カリキュラム論として構築・整備し、

実践的な提案として行われているものはない。

(2) 国外の研究動向

先行研究の文献によると国外では欧米圏の研究が先行していると考えられる。本研究もカナダのコミュニケーション教育と連携を図っているが、コミュニケーションの共通した阻害要因が見出せるなど、研究動向としてほぼ同じ様態の進展状況を示していることが明らかになっている。

(3) 本研究の研究動向における位置づけ

これまでこの共同研究体制は、科学研究費補助金による研究に13年間(自主的な期間1年を含む)取り組んできたことで国内をリードしてきた。具体的には、まず「国語能力の発達」という観点から、国語科教育の「読む・書く・聞く・話す」の4領域全般に関わる能力発達の調査・実態研究に取り組み、発達の要因を把握し、国語科カリキュラムの科学的基礎を得たこと(平成6～11年度)。「コミュニケーション能力の発達」に焦点化し、児童に対するコミュニケーション能力の発達調査によりその要因を把握したこと、対教師アンケートを実施し、教師のコミュニケーション能力発達観をとらえたこと(平成12・13～15年度)。これを中学校へ広げて、実験授業を積み重ね、実践的な教材・単元・カリキュラムの開発として結実させたこと(平成16～18年度)。広範にわたり本共同研究体制が継続的に大きな成果を得てきたといえる。

2. 研究の目的

音声言語によるコミュニケーション能力の育成に関して、小学校・中学校連携の有機的関連化を図る基礎理論の体系的構築、カリキュラムの開発・整備、実験授業を経たモデル授業の開発を行う。

まず基礎理論の体系的構築に関しては、授業観察・教師へのアンケート・インタビュー・コミュニケーションモデルの理論的研究などを集約して、実践理論の開発に対して有効性の高い基礎理論の構築を行う。

ついでカリキュラムの開発・整備に関しては、これまでの先行実践の体系的整理・先行カリキュラム案の検討などをふまえて実験授業に対する研究仮説となるカリキュラムを開発・整備する。これは、実験授業による検証を通して実践的カリキュラムとして提案される。

さらに実験授業を経たモデル授業の開発では、最初に小学校中学年、小学校高学年、中学校の三段階に分けて、それぞれ共通の仮説に基づいた実験授業を行う。またその際、音声言語コミュニケーション能力の育成に

有効な教材開発(3～8時間単元用)をそれぞれ複数開発する。

最終的に小学校中学年から中学校にかけての連続性・有機的関連性のある教材を開発・提案することになる。これも実験授業を経てその有効性が検証される。また実験授業では有効性の高い授業モデルの構築も行う。

本研究は特に中学校への重点化を図り、遅れていると考えられる話し合い指導に関する実践理論の解明・実践方法を開発するところに特色がある。

3. 研究の方法

(1) 先行研究の整理・検証

これまで取り組んできた先行の研究(本科研の前段階の『国語科教育改善のための言語コミュニケーション能力の発達に関する実験的・実践的研究(平成16年度～平成18年度・基盤研究(B))』)の集約を行い、研究仮説・研究計画の再立案・整備を行う。

(2) 先行実践(単元案)に対する実践的・経験的見地からの検討

上記前回科研『国語科教育改善のための言語コミュニケーション能力の発達に関する実験的・実践的研究』により得られた知見(授業方法・カリキュラム案)を基に現場教師(小学校・中学校)に対するアンケート・インタビューを行い、経験知の観点から見た有効性の検証を行い、研究仮説導出の基礎理論、実験授業計画立案の科学的基礎とする。

(3) 音声言語コミュニケーション能力育成に有効な教材開発

音声言語コミュニケーション能力育成に有効な教材開発のための基礎理論の構築、上記前回科研『国語科教育改善のための言語コミュニケーション能力の発達に関する実験的・実践的研究』により開発された教材の再検討に取り組み、実験授業において使用する教材を開発する。小学校中学年用、小学校高学年用、中学校用の三種類を開発する。

(4) 実験授業の実施・分析・検討

音声言語コミュニケーション能力の中でも話し合い能力に特化して、実験授業計画立案、実施、検討・検証を行う。精細な授業観察を行い、記録の資料化を図るとともに研究分担者、研究協力者(実践者)の観察と授業担当者の協議を重ねて、経験的な知見も十分に資料化する。それぞれ3～5時間程度の単元を行う。

(5) 小学校・中学校連携のプログラム・カリキュラムの構築

上記研究活動を総括し、研究仮説、授業仮

説を導出・整備する。また実験授業用に開発された教材の検討を行い、より有効性の高いものへの整備する。音声言語コミュニケーション能力育成（特に話し合い）のための小学校・中学校連携のプログラム・カリキュラム提案を行う。

4. 研究成果

(1) 成果の概要

幼小連携、小中連携の目的で校種間のコミュニケーション能力の連続的なカリキュラム開発のための研究に取り組んだ。これまでに得られた発達モデル・仮説に基づき、それぞれの校種間で実験授業を行い、教材開発、単元開発、カリキュラム開発を行った。特にこれまで不十分であった中学校の話し合い学習によるコミュニケーション能力の開発に関する単元開発では、フィールド校を絞って、学年進行に合わせて、実験授業を連続、関連付けて実効性の高いものを案出、検証するに至った。これまでも公開授業、学会発表などを行い研究成果の積極的な公開に務めているが、今後、得られた実験授業の記録の分析を通して、カリキュラム化の作業を進めており、効果的な公開方法を検討している。

(2) コミュニケーションモデルの構築

話し合いの能力を、個の中の閉じた能力ではなく、関係性の中で捉えられる能力であると捉え、Neil, Mercer の立論を手がかりにコミュニケーションモデルを構築した。話し合い活動を捉える際に、一つ一つの発話の機能を問題にするのではなく、話し合いのやりとりに注目し、そこに見られる展開の質に着目する考え方である。コミュニケーションモデルの観点として、以下の3点を導いた。(1)累積(拡散・連鎖)…低学年・中学年・高学年以降、(2)分離(対立・協調)…中学年以降、(3)組織化…高学年以降。そして、同一課題による小学生の話し合い能力の発達に関する調査に照らして、分析を行った。

また中学生の話し合い能力のカリキュラム開発を行い、以下の学年目標を立てた。

1年：論証の意識化…自分の主張の“理由”における根拠(事実・事例)と論拠(理由づけ)の区別〈他者に対する自己〉

2年：対立する相手の立場に立って…自分の主張とは違う立場を想定する。相手の立場に立って考える。〈具体的、特定の他者〉

3年：多角的な考えを持って…対立する立場を含めて、複数の立場や考えを想定して最適なものを選択する。〈想定される他者〉

(3) 論証的な話し合いについての中学校実験授業

2008年7月17日に大阪府箕面市立止々呂

美中学校において中学1～3年生の複式学級において、話し合いの取り立て指導の実験授業を行った。ホームページに掲載する止々呂美の特産品の優先順位を話し合うという課題だった。分析の結果、三角ロジックを用いた話し合いでは、根拠と論拠とを理解し、使いこなすための手立ての必要性が明らかになった。

2008年10月31日、11月6日及び2009年9月29日30日に岡山市立高松中学校において中学校2、3年生に対する話し合いの取り立て指導の授業を行った。中学校3年生のカリキュラム上の指導事項は、多角的な考えを持って、対立する立場を含めて、複数の立場や考えを想定して最適なものを選択する、というものである。具体的には、多角的な考えを持つ、社会へ視野を広げる、反証に備えて発表する、という課題を立てた。2008年度の三角ロジックを用いてアナウンサーへの質問を行う課題に対して、2009年度は、18歳成人論を踏まえて成人年齢を決定する話し合いを行った。分析の結果、社会にまなざしを向ける公共性を持った課題に対して論証的に話し合うことが有効であることが明らかになった。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計35件)

- ① 村井万里子、作文指導を基礎とする小学校国語科教師養成カリキュラムの開発(2)－「対話環」理論の現象学的基礎づけ－、鳴門教育大学研究紀要、査読無、25、2010、115-129
- ② 山元悦子、稲田八穂、小学校高学年の発達特性を踏まえたコミュニケーション能力の育成に関する研究、福岡教育大学紀要、査読無、59-1、2010、119-142
- ③ 間瀬茂夫、説明的文章の読みにおける論証理解の協同性、国語教育研究、査読無、51、2010、56-65
- ④ 三浦和尚、読むことの学習指導の方法改善に向けて、日本語学、査読有、26、2009、4-13
- ⑤ 三浦和尚、幼・小の接続期におけることばの発達とその指導、愛媛大学教育学部紀要、査読無、56、2009、129-140
- ⑥ 上田祐二、論証の構成を意識させた文章

表現指導の試み, 語学文学, 査読無, 47, 2009, 1-14

- ⑦ 間瀬茂夫, 説明的文章の読みにおける「論理」の再検討, 広島大学大学院教育学研究科紀要, 査読無, 58, 2009, 103-111
- ⑧ 河野順子, 読書教育の新しい試み—説明的文章における「批評読み」から「読書」へ—, 読書科学, 査読有, 52-3, 2009, 103-111
- ⑨ 山元隆春, 「交流理論」は学習者に何をもたらすか: 「批評的読み」の基礎としての「審美的読み」, 広島大学大学院教育学研究科紀要, 査読無, 57, 2009, 107-116
- ⑩ 植山俊宏, 文章論的観点による説明的文章の教材研究法—「動物の体」(東京書籍小学校五年上)を中心に—, 大阪国語教育研究会編 野地潤家先生卒寿記念論文集, 査読無, 2009, 262-269
- ⑪ 守田庸一, 住田勝, 小学生の話し合い能力に関する実践的研究: 中学年を対象とした実験授業を通して, 大阪国語教育研究会編 野地潤家先生卒寿記念論文集, 査読無, 2009, 160-179
- ⑫ 住田勝, 初等教育入門期における物語の読みの学習指導: 「サラダでげんき」を軸として, 学大國文, 査読無, 52, 2009, 57-77
- ⑬ 田中智生, 教育実習における「話すこと・聞くこと」に関する学び, 日本語学, 査読有, 28-5, 2009, 16-23
- ⑭ 田中智生, 中学校における合意形成のための話し合いの実験授業?論証の場の状況に対応することによる論理的共感, 月刊国語教育研究, 査読有, 445, 2009, 4-9
- ⑮ 植山俊宏, 教材研究試論—「坊っちゃん」における「おれ」の「清」像の変化に着目して—, 二七会編集委員会編『漱石作品を読む—「二七会」輪読五十年—』, 査読なし, 2008, 195-205
- ⑯ 植山俊宏, 陳述機能に着目した説明的文章教材の結束性に関する研究—「ありの行列」を例に—, 大阪国語教育研究会『小田迪夫先生古希記念論文集』, 査読無, 2008, 184-195
- ⑰ 上田祐二, 電子メディアにおけるコミュニケーション能力—合意形成の様相に注目して—, 国語科教育, 査読有, 64, 2008,

11-18

- ⑱ 守田庸一, 説明文教材の読みにおける筆者との出会い, 語り合う文学教育, 査読無, 6, 2008, 24-30
- ⑲ 寺田守, 戦争児童文学教材の授業の課題: 「お母さんの木」(大川悦生)の教材分析を中心に, 国語の研究, 査読無, 34, 2008, 21-30
- ⑳ 住田勝, 国語科小中一貫(連携)カリキュラムづくりの視点: 読解指導を中心として, 大阪国語教育研究会編『小田迪夫先生古希記念論文集』, 査読無, 2008, 196-207
- ㉑ 三浦和尚, 『それから』における植物に関する一考察, 二七会編集委員会編『漱石作品を読む—「二七会」輪読五十年—』, 査読無, 2008, 89-95
- ㉒ 櫻本明美, 「つながり」の深化の過程を重視する話し合いの授業に向けて—五年生「マザー・テレサ」(東京書籍)の実践を例に—, 月刊国語教育研究, 査読有, 434, 2008, 52-59
- ㉓ 田中智生, 中国における語文科課程改革の国家案と地方案との比較, 岡山大学国語研究, 査読無, 22, 2008, 1-10
- ㉔ 山元隆春, リテラシー教育におけるグラフィックノベルの役割—米国における事例を手がかりとして—, 国語教育研究, 査読無, 49, 2008, 33-56
- ㉕ 山元悦子, コミュニケーション能力の発達に関する研究—小学5年生における認知・思考の発特性, 福岡教育大学紀要, 査読無, 58, 2009
- ㉖ 植山俊宏, 他教科と国語教育—各教科は読解指導をどう考えているか—(国語科教育の立場から), 国語科教育, 査読有, 61, 2007, 9-10
- ㉗ 植山俊宏, 「ごんぎつね」再考—「加助」から「茂平」, そして“みなさん”への物語として読む—, 日本語学, 査読有, 324, 2007, 12-21
- ㉘ 住田勝, 臨床国語教育学の授業論: 研究者が実践者とともに授業を作る取り組みの実際, 臨床国語教育学を学ぶ人のために, 査読無, 2007, 271-282

- ②⑨ 住田勝, ごっこ遊びから文学の読みへ: 入門期教材の分析を中心として, 月刊国語教育研究, 査読有, 419, 2007, 46-51
- ③⑩ 田中智生, 国語教育における思考力を考える, ことばの学び, 査読無, 13, 2007, 2-5
- ③⑪ 富安慎吾, 昭和 30 年代前期の国語科教育課程における漢文教育の位置づけ—『高等学校学習指導要領国語科編』(昭和 31 年)改訂時の議論に注目して—, 国語科教育, 査読有, 61, 2007, 19-26
- ③⑫ 山元隆春, 「失いつづけたすべてのもの」の打ち上げられる場所と「行くべきところ」との間で—文学教育の「転回」と「希望」のために—, 日本文学, 査読有, 56-8, 2007, 53-62
- ③⑬ 山元隆春, 書物への没頭/わたくしの非在—読書体験成立の条件—, 月刊国語教育研究, 査読有, 423, 2007, 6-11
- ③⑭ 間瀬茂夫, 守田庸一, 松友一雄, 田中俊弥, 小学生の話し合い能力の発達に関する研究—同一課題による調査を通じた考察—, 国語科教育, 査読有, 2007, 67-74
- ③⑮ 山元悦子, コミュニケーション能力を育てる国語教室カリキュラムの開発—発達特性をふまえたコミュニケーション能力把握に立って—, 福岡教育大学紀要, 査読無, 57, 2007, 59-76

[学会発表] (計 5 件)

- ① 村井万里子, 理解とパフォーマンスの評価基準研究, 第 116 回全国大学国語教育学会, 2009 年 5 月 30 日, 秋田大学教育学部
- ② 村井万里子, 国語科指導力の基礎研究—子どもの書く力をどう捉えるか—, 第 117 回全国大学国語教育学会, 2009 年 10 月 18 日, 愛媛大学教育学部
- ③ 山元悦子, 稲田八穂, 高学年の発達特性をふまえたコミュニケーション能力の育成に関する研究, 第 117 回全国大学国語教育学会, 2009 年 10 月 18 日, 愛媛大学教育学部
- ④ 間瀬茂夫, 宮本浩治, 小グループの話し合いにおける説明的文章の推論的読みに関する研究, 第 116 回全国大学国語教育学会, 2009 年 5 月 31 日, 秋田大学教育学部
- ⑤ 河野順子, 入門期の説明的文章の学習指導に関する一考察—熊本大学教育学部附属幼稚園における参与観察を通して—, 第 117 回全国大学国語教育学会, 2009 年 10 月 18 日, 愛媛大学教育学部

[図書] (計 5 件)

- ① 村井万里子 (共著), 教育実践の省察力をもつ教員養成—教育実践に結びつけることができる教員養成コア・カリキュラム, 協同出版, 2010, 326
- ② 村井万里子 (共著), 教育実践から捉える教員養成のための教科内容学の研究, 風間書房, 2009, 270
- ③ 三浦和尚 (共著), 国語科教育実践・研究必携, 学芸図書, 2009, 356
- ④ 河野順子 (共著), 新たな時代を拓く 小学校国語科教育研究, 学芸図書, 2009, 206
- ⑤ 河野順子, 入門期のコミュニケーションの形成過程と言語発達—実践的実証的研究—, 溪水社, 2009, 306

[産業財産権]

- 出願状況 (計 0 件)
○取得状況 (計 0 件)

6. 研究組織

(1) 研究代表者

位藤 紀美子 (ITO KIMIKO)
京都教育大学・学長
研究者番号: 80027713

(2) 研究分担者

植山 俊宏 (UEYAMA TOSHIHIRO)
京都教育大学・教育学部・教授
研究者番号: 50193850

田中 智生 (TANAKA NORIO)
岡山大学・教育学部・教授
研究者番号: 00171786

村井 万里子 (MURAI MARIKO)
鳴門教育大学・学校教育学部・教授
研究者番号: 30174262

三浦 和尚 (MIURA KAZUNAO)
愛媛大学・教育学部・教授
研究者番号: 40239174

山元 隆春 (YAMAMOTO TAKAHARU)
広島大学大学院・教育学研究科・教授
研究者番号：90210533

難波 博孝 (NANBA HIROTAKA)
広島大学大学院・教育学研究科・教授
研究者番号：30244536

山元 悦子 (YAMAMOTO ETSUKO)
福岡教育大学・教育学部・教授
研究者番号：20220452

中西 淳 (NAKANISHI MAKOTO)
愛媛大学・教育学部・教授
研究者番号：10263881

櫻本 明美 (SAKURAMOTO AKEMI)
神戸親和女子大学・発達教育学部・教授
研究者番号：70319846

河野 順子 (KAWANO JUNKO)
熊本大学・教育学部・教授
研究者番号：80380989

上田 祐二 (UEDA YUJI)
北海道教育大学・教育学部・教授
研究者番号：50213369

間瀬 茂夫 (MASE SHIGEO)
広島大学大学院・教育学研究科・准教授
研究者番号：90274274

住田 勝 (SUMIDA MASARU)
大阪教育大学・教育学部・准教授
研究者番号：40278594

守田 庸一 (MORITA YOUICHI)
三重大学・教育学部・准教授
研究者番号：60325305

寺田 守 (TERADA MAMORU)
京都教育大学・教育学部・准教授
研究者番号：00381020

富安 慎吾 (TOMIYASU SHINGO)
島根大学・教育学部・講師
研究者番号：40534300